

(大島郡宇検村宇検)

位置と環境

本遺跡は、焼内湾の入口にある枝手久島の北側の海峡に位置する。海峡は長さ約2000m、幅250～600m、水深約3mで海底は比較的浅く、白砂の海岸に囲まれている。海底には色とりどりの珊瑚が豊かに群生している。

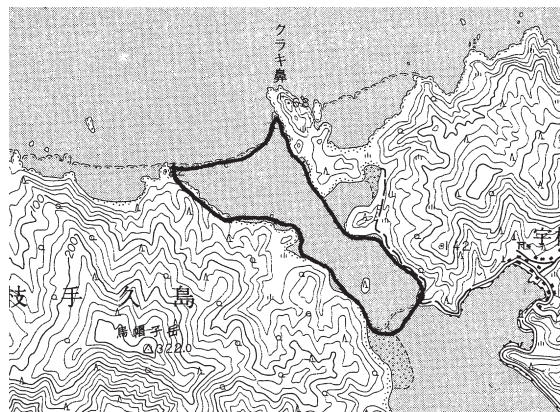
調査の経緯

平成6年8月に発見され、平成7年6月、宇検村教育委員会が独自に予備調査を実施したところ、海底一帯に中国製陶磁器が多数散乱していることが分かった。その結果、平成8年、9年、10年の3回にわたり文化庁と鹿児島県教育委員会の助成で重要遺跡確認調査として実施した。

平成8年からの確認調査は、遺跡の範囲（遺物散布の状態）の確認と遺跡の性格、それに遺物の残存状況や時代の確認と併せて、さらに陸上の遺跡との関連性についてのデータの収集と記録を行った。

水中考古学の調査は、鹿児島県では本遺跡が初めての事で、国内でも実例が少なく、基本的なマニュアルも少ない中、調査は珊瑚などの貴重な自然環境に配慮しながら倉木崎独自の方法で実施した。

陸地からの測量によって、海底にロープで一辺が20mのグリッド（升目）を設置し、このグリッドごとにスタッフが、散乱遺物の確認と正確な位置の測量、写真撮影などの記録を終え、遺物を取り上げた。



第1図 倉木崎海底遺跡の位置

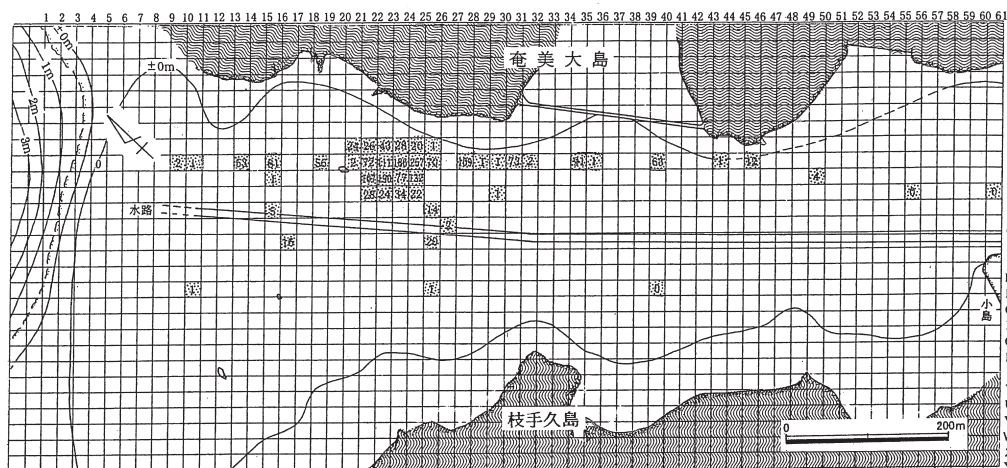
(第2図)

平成8年は4グリッド（1600㎡）、平成9年13グリッド（5200㎡）、平成10年24グリッド（9600㎡）の海底の調査をし、遺物の採取をした。

遺構と遺物

平成7年の予備調査では、青磁、白磁の碗や皿などの破片36点の遺物を取り出した。平成8年の調査では478点、平成9年度758点、平成10年の調査では1054点。4年間で合計2326点の遺物を取り出した。又、平成10年の調査では天目碗片が1点発見された。海底での遺物の広がり、東西約900m、幅約200mの広さに及ぶものと考えられる。

これらの遺物は、最初、海底から引き上げた時は、珊瑚や小貝それに藻などの海草類が付着し、そのまま放置しておくと数日で悪臭を漂わす。珊瑚などは付着力が強く、少々の洗浄では取り除く事ができないため、一部は弱酸性の薬物処理するなど、一番



第2図 海底遺跡のグリッドと検出遺物数量分布

遺物の洗浄作業に手間と時間を要した。

特徴

採取した遺物の内訳は、青磁が1383点（その内龍泉窯系^{りゅうせん}のものが1,173点、同安窯系^{どうあん}のものが210点）で、白磁が189点、青白磁が20点、黒釉天目碗が1点、黄釉陶器が14点、褐釉陶器716点、土器2点、量的に最も多いのは龍泉窯系の青磁碗で1160点、次いで褐釉壺の369点です。これらの遺物の特徴は、破断面が比較的鋭利で完形品が少ないことである。

出土遺物は、12世紀後半から13世紀初頭の中国製の陶磁器で種別では青磁の碗、皿が多く、次に褐釉陶器の壺、甕、鉢、白磁の碗、皿、四耳壺、青白磁の碗、皿、合子、小壺などで、生産地としては浙江省の龍泉窯系、江西省の景德鎮窯系^{けいとくちん}、福建省建窯系、同安窯系、磁竈窯系^{じそう}など中国南部の製品が確認されている。

この4年間の調査で約2,300点のぼる大量の遺物が発見された。時代が1世紀前後に限られることや、遺跡の近くの民家から中世の「碇石」が発見されたこと（今のところ海底遺跡と碇石の繋がりはない。）、

平成10年の調査で天目碗が発見されたことなどを考えると、日本に向かった貿易船が何らかのトラブルで沈没した可能性が考えられる。

資料の所在

出土遺物は、宇検村教育委員会に保管され、主なものは生涯学習センター「元気の出る館」に展示している。

参考文献

宇検村教育委員会1998「倉木崎海底遺跡」『宇検村埋蔵文化財発掘調査概報』第1集

宇検村教育委員会1999「倉木崎海底遺跡」『宇検村埋蔵文化財発掘調査報告書』第2集

（元田信有）



写真3 海底の遺物散布状況



写真1 グリッド設定作業（海上基地）



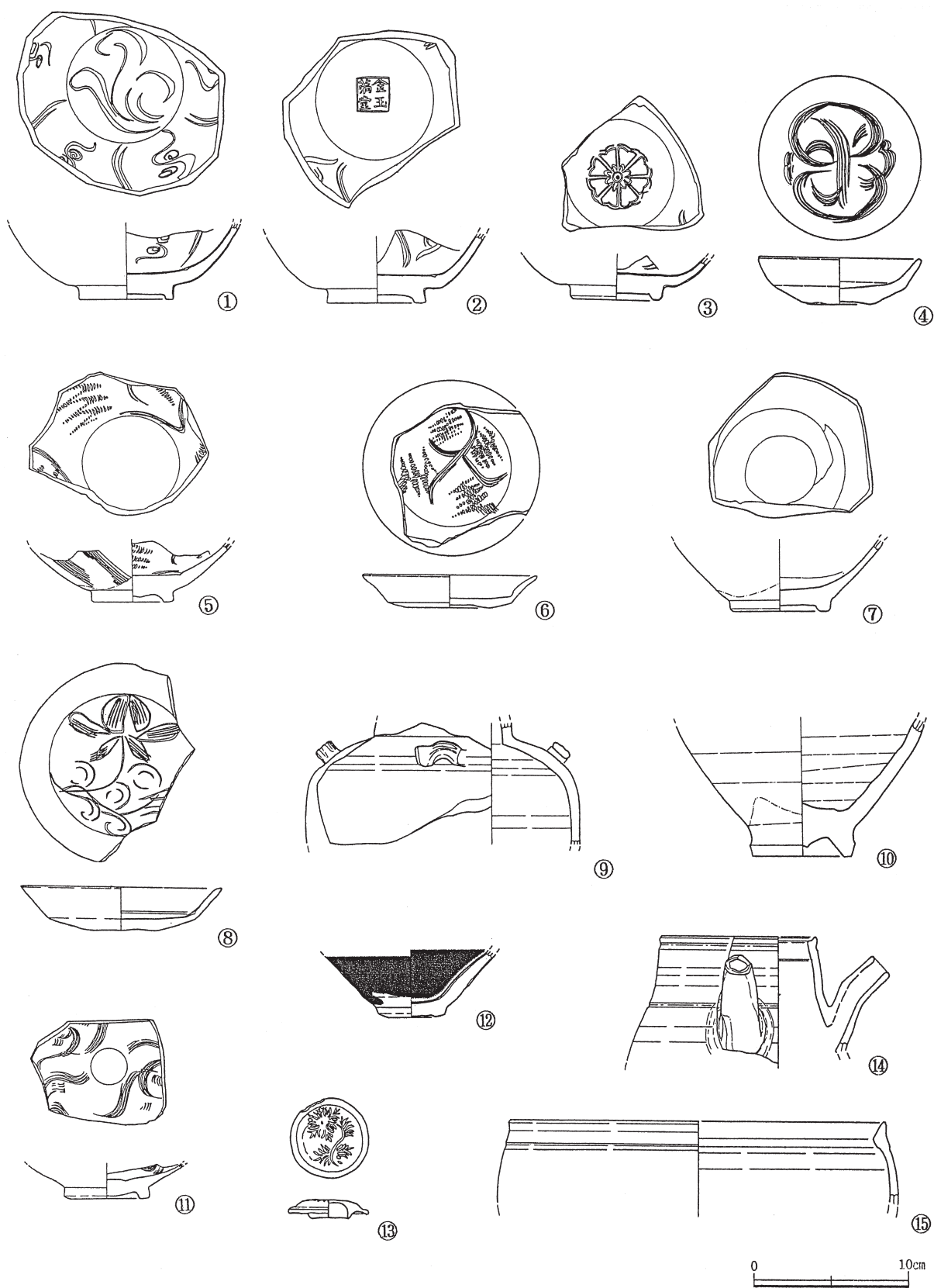
写真4 海底から取り上げた遺物



写真2 海中での作業とグリッド杭の状況



写真5 倉木崎海底遺跡出土遺物



●龍泉窯系青磁碗・皿①②③④，同安窯系青磁碗・皿⑤⑥，白磁碗⑦，白磁皿⑧，白磁壺⑨⑩，景德鎮系青白磁碗・小壺蓋⑪⑬，天目茶碗⑫，褐釉水注・鉢⑭⑮

第3図 出土遺物